

第152回

日本児童文学学会関西例会
(宮沢賢治学会地方セミナーとの合同開催)

発表要旨

日 時 2023年3月21日(火・祝) 13時30分～16時15分

場 所 大阪府立中央図書館 ライティホール

講演と対談「日本児童文学が宮沢賢治から受け取ったもの」

1. 基調報告「宮沢賢治の評価史と賢治童話の影響をうけた児童文学」

宮川健郎 (IICLO 理事長、宮沢賢治学会理事)

2. 講演「賢治童話の絵本化とマンガ化」

大島丈志 (文教大学教授、宮沢賢治学会理事)

3. 対談「童話作家・富安陽子さんに「賢治」を聞く」

聞き手・遠藤純 (IICLO 理事、武庫川女子大学准教授、宮沢賢治学会理事)

共 催：宮沢賢治学会イーハトーブセンター

一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団

基調報告「宮沢賢治の評価史と賢治童話の影響をうけた児童文学」

宮川 健郎

基調報告のおしまいに、賢治童話の受容の一つとして絵本化のことをとりあげ、つぎの大島丈志さんの講演につなげたいと考えた。それにかかわる資料として、宮川健郎「賢治童話の「絵本化」をはばむもの」(『絵本 BOOK END 2013』)という文章を配布した。そのなかでも、絵本の「理想形」の一つとしてあげているのが、レオ・レオーニの『あおくんと きいろちゃん』(藤田圭雄訳、至光社 1967 年)である。絵本のテキストの訳文に、以下の部分がある。

「あおくんと きいろちゃんは かなしくなって なきました／おおつぶの あおい なみだと きいろい なみだが こぼれました／ないて ないて なきました／ふたりは ぜんぶ なみだになってしまいました」

この「ないて ないて なきました」からは、すぐに、賢治の「注文の多い料理店」を思い出す。あおくんときいろちゃんが、おとうさんとおかあさんに、うちの子どもではないといわれて、いわば、自分が何なのかわからなくなったとき、「ないて ないて なきました」となる。『あおくんと きいろちゃん』を読み聞かせるとき、ふたりの紳士が山猫たちに命をうばわれそうになったときの「泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました」という「注文の多い料理店」のイメージがひらっとひらめく。こんなふうに、賢治童話のさまざまなフレーズは、日本児童文学に「身についたもの」になっているのではないか。

さて、その賢治童話の受容の歴史、もう少し角度をつけて、「評価史」をたどってみた。参考文献は、続橋達雄「賢治童話評論史」(『宮沢賢治・童話の世界』桜楓社 1973 年所収)だ。

石井桃子他『子どもと文学』(中央公論社 1960 年)の「私たちは、宮沢賢治のかなりたくさんの作品が、正しい意味で、子どものための文学であり、それが大人をさえ楽しませることができたのだと信じます。」(「宮沢賢治」の章、執筆は瀬田貞二)という意見と、神宮輝夫「賢治童話と“児童文学”としての資格」(『どんぐりと山ねこ』大日本図書 1968 年解説)の「作品の完成度の高さよりまえに、賢治の童話には、子どもの文学としての資格をえたものと資格のないものの二種類がある」という意見を対比して考えた。どちらの意見も、何を根拠にしているのか、わかりにくい。そして、どちらの意見に与するか考えようとする、それなら、いったい子どもの文学(児童文学)とは何なのかという問題にぶつかってしまう。

賢治の影響をうけたと考えられる児童文学作家についても言及した。「グスコブドリの伝記」などの自己犠牲的なテーマを引きうけた斎藤隆介や、賢治童話の詩的性格を引きついだ安房直子やあまんきみこの名前をあげた。富安陽子さんのことは、あとの遠藤純さんとの対談にゆだねた。

日本の子どもの文学は、詩的、象徴的なことばで心象風景を描く短編の「童話」から、もっと散文的なことばで、心のなかの景色ではなく、子どもという存在の外側に広がっている状況(社会)や、状況(社会)と子どもの関係を描く長編の「現代児童文学」へと転換した。賢治童話の影響が見られるのは、1960 年前後の「現代児童文学」の成立後も残る「童話」の系譜の作家たちなのではないか。「ちょうど一九五〇年代の末までぼくはむしろ児童文学の専門家になろうと思っていた。」と述べた(共同討議「現代詩の危機」『ユリイカ』1971 年 5 月での発言)天沢退二郎の賢治研究と、『光車よ、まわれ!』(筑摩書房 1973 年)ほかの天沢のファンタジーにもふれた。

賢治童話を絵本にすることが、さかんに試みられてきたけれども、賢治のテキスト自体が絵本化をはばむところがある。賢治童話の絵本化はアポリア(難問)であるという、かねてからの意見を述べて、大島丈志さんにステージを明けわたした。

講演「賢治童話の絵本化とマンガ化」

大島 丈志

講演の前半では、賢治童話の受容と再創造に関して述べた。

リンダ・ハッチオン、辻麻子訳『パロディの理論』（未来社、1993年）を基盤とし、嘲笑・遊戯を超えた差異と批評的距離を持った創造を再創造として扱うとした。また、原典（賢治童話）と再創造（絵本化・マンガ化）の優劣ではなく、どのように受容し再創造したのか、再創造から考えられる賢治童話の特徴を探りたいと主張した。その上で、「空白」（語られていない、もしくは不確定で、読者に多義的な解釈を想像させる箇所）こそが「再創造」のポイントであり、賢治童話にはこの「空白」が多くあることを、ヴォルフガング・イーザー、轡田収訳『行為としての読書』（岩波書店、1982年）や、いわさきちひろの賢治童話評（『ラブレター』講談社、2004年）から論じた。

現在、絵本化295件（2022年末まで）、マンガ化57件（2022年末まで）であり、約9割が著作権の切れた1984年以降に刊行されており、著作権が切れたことによる再創造は今後も拡大していくことを指摘した。

講演の後半ではどのように再創造されたのかを、「命とまこと」「表現（空白）への挑戦」「技術主義批判」の三つの観点から論じた。

「命とまこと」については、「よだかの星」を取り上げた。この観点が良く表れている「よだかの星」の終結部については「もっとも高い精神」（梅原猛『地獄の思想』中央公論社、1967年）と高く評価するもの、「宿業に対する悲哀と苦悩」（丹慶英五郎（『宮沢賢治』若樹書房、1962年）のように悲哀を読むもの等、評価が分かると指摘した。仏教の「殺生」の罪からの考察や丘浅次郎『進化論講話』（開成館、1904年）を参照しつつ、「よだかの星」では生存競争は認めるが過剰さや憐みの無さが批判されていることを指摘した。生存競争の苦しみからの解放として「まこと」があることを恩田逸夫の論考（『宮沢賢治論1』東京書籍、1981年）を引用して論じ、「命とまこと」に対しては絵本化において多様な解釈がなされており、画家の批評的読解を受けた読者が自らの読みを考え、新たな再創造が生み出される例だと指摘した。同じ観点を持つ「なめとこ山の熊」の熊の解体の場面では、あべ弘士版（三起商行、2007年）の絵本化を挙げ、あべ弘士の絵本化についての松田素子（『絵本BOOK END』絵本学会、2014年10月）の論考を引用し、原典から飛躍した「生き物の業」の表現がなされること点を指摘し、飛躍した表現こそ再創造の特徴だとした。

次に、「表現（空白）への挑戦」として、「注文の多い料理店」を取り上げた。紳士たちの「くしやくしやく」という描写は表現の「空白」だとした。小林敏也版（パロル舎、1989年）と島田睦子版（偕成社、1984年）では「くしやくしやく」をどのように表現するかに大きな差異があることを指摘し、この描写に限らず多くの「空白」をどう読むのか、「空白」に挑戦する点で賢治童話は再創造の「源泉」になりうるとした。

最後に、「技術主義批判」として「氷河鼠の毛皮」の二つの再創造を挙げた。たむらしげる版（潮出版社、1985年）のマンガ化にみられる、タイチの自慢話自体が小さく見える大宇宙（「まこと」といえる大きな世界観の提示、木内達朗版（偕成社、2008年）の絵本化の襲撃者を白熊にして「人間」対「自然」の対立をより明確にする再創造から考えると賢治童話の「氷河鼠の毛皮」には、「生存競争」の肯定と、「あんまり無法なことはこれから気を付けるやうに云ふから今度はゆるして呉れ」という、極端な結論には飛びつかない、いわば宙づり状態を耐える、苦しい「技術主義批判」が見られることを指摘した。

以上より、賢治童話の絵本化・マンガ化は新しい読みが生まれる源泉であること、突き付けられた再創造を読者が考えることでまた新しい読みが生まれる創造の連鎖の過程であること、再創造の読みから賢治童話の新しい解釈も生まれるのであり、それらが賢治童話の絵本化・マンガ化を追い続ける楽しみであるとした。

対談「童話作家・富安陽子さんに「賢治」を聞く」

賢治との出会いは、小学校1年生のときにレコードで聞いた宇野重吉朗読の「狼森と笹森、盗森」（『宮沢賢治童話集』収録、中央公論社、1971年）に始まる。当時、NHK大河ドラマで「赤穂浪士」が放映されていたが、宇野重吉演じる「蜘蛛の陣十郎」が大好きで、母からのちにその声と賢治作品の朗読（宇野）が同じと聞いた。この対談の話を受けたとき、宇野重吉の声で賢治を聞いた覚えがあることを突然はつきりと、声まで蘇って思い出した。まだ文章として読むずいぶん昔から、私は賢治の物語を耳で聞いていたことになる。自分で意識していないところで、耳から聞いた賢治が血となり肉となって、自身の作品に投影されているのだろうと思う。

中学時代になって賢治を好んで読み、方言が持つ力を実感した。最初の長編『やまば山のモッコたち』（福音館書店、1986年）の山姥もまゆもみんな大阪弁を話す物語として書いたが、これは当時、私が東京の大学にいるときに書き出したもので、大阪の言葉で書いてみたいと思ったからだ。

好きな賢治童話としては、まず「狼森と笹森、盗森」がある。言葉の力強さが印象的な作品である。また、「雪渡り」も忘れられない。これもやはりソノシート（石井桃子：脚色、朝日ソノラマ、1961年）で聞いた。大好きな物語で、今でも作中の歌を唄うことができる（会場にて歌唱・披露）。私も狐の世界に行きたくて、紺三郎からいつお誘いがあったらいいように、たえずお土産用のお菓子をためて隠していたが、そのうちに懲びて母に叱られたものだ。

最後は「どんぐりと山猫」を挙げたい。叔母にねだって何度も読んでもらった。馬車別当や一郎のキャラクターが好きだったし、自分が招待されたら間違えずにお土産は「塩鮭の頭」と言おうと考えていた。「雪渡り」も同じだが、ふだんは立ち入る事のできない異界に人間の世界から入っていく賢治童話の感覚が好きだ。何かのきっかけでふだんは閉ざされている扉が開かれる。自作『クヌギ林のザワザワ荘』（あかね書房、1990年）も同じ構図だが、自分の中に息づいているファンタジーの世界だといえる。

その他、「貝の火」も印象的である。主人公は悪くないのにあまりにも厳しい罰を受ける。ショックを受け、慢心してはならないと自分にいつも言い聞かせることにつながっている。「洞熊学校を卒業した三人」はボロンとお腹がはじけるなど、オノマトペが異様に怖かったのを覚えている。

作中の好きな表現では、「水仙月の四日」の自然描写がある。目に見えるように鮮やかさに、美しさと力強さを兼ね備えて表現されている。今読み返してみても、言葉がイメージをかき立ててくれ、ありありと風景を見せてくれる言葉である。

思うに、私のなかでは幼少の頃から聞いた妖怪など日本古来の話と、のちに自分が出会った西洋のファンタジーなど、多くの翻訳ものに囲まれて育った部分が渾然一体となって物語を創り出しているようだ。どうやって物語を作っているのかと問われる事も多いが、夢でお話の種をもらうことも多い。それで完成した作品が『タヌキの土居くん』（福音館書店、2022年）だ。これも「雪渡り」と同じ構図で、人と人ならぬものの交流を描く作品だと感じている。

賢治のように、一行読んだだけで賢治とわかるような文章、文章を読めば目の前に風の音、雪の気配などの風景が立ち上がってくるような作品を書きたいと思い、今日まで書き続けてきた。胸の奥の奥にあるそうした思い、それは賢治からもらってきたものだ。賢治から受け取ったものが何かと問われれば、そういうことになるだろう。

（文責：遠藤純）

2023年6月30日発行

第152回 関西例会担当

鵜野 祐介（立命館大学）

遠藤 純（武庫川女子大学・大阪国際児童文学振興財団）

柿本 真代（京都華頂大学）

渡辺貴規子（大阪大学）